

## メッセージアウトライン 創世記24:28～67「イサクの結婚Ⅱ」

[28]「その娘は走って行って、母の家の者に、これらのことを告げた」

リベカは井戸のそばで旅人とらくだに親切に水を飲ませてやったことで、旅人は金の飾り輪と金の腕輪を彼女に与え、彼女は走って行って、母の家の者に旅人との会話とその後の出来事についての一切を語った。

[29-32]「リベカには兄がいて、その名をラバンといった。ラバンは外へ出て、泉のそばにいるその人のもとへ走って行った。すると見よ、その人は泉のそば、らくだのそばに立っていた。そこでラバンは言った。『どうぞおいでください。主に祝福された方。なぜ外に立っておられるのですか。私は、お宿と、らくだのための場所を用意しております。』それで、その人は家の中に入った。らくだの荷が解かれ、らくだに藁と飼料が与えられ、彼の足と、一緒にいた従者たちの足を洗う水も与えられた」

「ラバン」リベカの兄で彼女と同じベトエルの息子、アブラハムの兄弟ナホルの孫。ここからラバンが会話と交渉の前面に出てくる。父ベトエルとその妻も存命中であるが、対外的な交渉においてはラバンに任せられていたのかもしれない。彼は妹リベカから事の次第を聞いて、旅人の一行を自分たちの家に招き、宿泊の用意ともてなしをする。

[33-34]「それから、彼の前に食事が出されたが、彼は『私の用件を話すまでは、いただきません』と言った。『お話し下さい』と言われて、彼は言った。『私はアブラハムのしもべです』」

この箇所からは、アブラハムのしもべがイサクの妻を見つけて帰るという大役を果たすための一途なまでの真剣さがよく表れている。ラバンたちも彼が親族アブラハムのもとから来たしもべであることを知って驚いたことであろう。

[35-49] 35~36節は彼の主人アブラハムの近況、37~41節はアブラハムがこのしもべをこの地に遣わした目的、42~44節はしもべの祈り、45~48節はその結果、49節はリベカをイサクの花嫁に迎えることの婉曲な申し入れとなっている。35~48節までは1~27節の繰り返しとなっているが、この繰り返しによる描写によって、そこに確かに主なる神が働いておられ、すべてが神のわざであることが強調されている。「イサクを親族の地に連れて戻ることだけはしてはならない」というアブラハムの命令(6,8)についてはしもべは何も語ってはいない。これはしもべの社会的な良識と判断の健全さを示すものであろう。

[50-53]「ラバンとベトエルは答えた。『主からこのことが出たのですから、私たちはあなたに良し悪しを言うことはできません。ご覧ください。リベカはあなたの前におります。どうぞお連れください。主が言われたとおりに、あなたのご主人の息子さんの妻となりますように。』アブラハムのしもべは、彼らのことばを聞くやいなや、地にひれ伏して主を礼拝した。そして、このしもべは銀や金の品物や衣装を取りだして、リベカに与えた。また、彼女の兄や母にも貴重な品々を贈った」

アブラハムの親族はメソポタミアの地にあっても、主なる神の配慮と恵みのうちにあった。それで、しもべのことばを聞いた時、即座に「主からこのことが出たのですから……リベカはあなたの前におります。どうぞお連れください…」と言うことができたと考えられる。偶像崇拜と不品行、呪術や姦淫の盛んなカナン地では同じような答えを得ることはないであろう。

[54-55]「このしもべと、ともにいた従者たちは、食べたり飲んだりして、そこに泊まった。朝になって彼らが起きると、そのしもべは『私の主人のところへ帰らせてください』と言った。彼女の兄と母は、『娘をしばらく、十日間ほど私たちのもとにとどまらせて、その後で行かせるようにしたいのですが』と言った」

アブラハムのしもべは、リベカをイサクの妻にする交渉がうまくいったので、少しここでゆっくりしようとは考えず、すぐに主人アブラハムのもとへ帰りたことを告げる。ここにも主人アブラハムとの誓いを誠実に果たそうする彼の姿を見る。しかし、有無を言わず帰るのではなく、あくまでも相手の許しを得て帰るという礼儀を重んじたかたちである。これに対して、彼女の兄と母はリベカを十日間ほど自分たちのもとにとどまらせてから行かせることを提案する。娘を手放す家族としては当然の情かもしれないが、その間に何が起こるかもわからない。後のラバンのイサクとリベカの子ヤコブに対する取り扱い方を見ると、気を抜くことはできない。→創世記31:38~42

[56-58] しもべの「私が遅れないようにしてください。主が私の旅を成功させてくださったのですから。…」(56) とのことばを受けて彼らは、「娘を呼び寄せて、娘の言うことを聞いて見ましょう」(57) と提案する。「この人と一緒に行くか」ここでは本人の意思が確認されている。「はい、行きます」(58) 家族の思いに相違してリベカは即座に、アブラハムのしもべとともに出発することを願った。これは神の招きに対するリベカの信仰の応答であった。これでアブラハムのしもべの最終的な心配も解消された。

[59]「そこで彼らは、妹リベカとその乳母を、アブラハムのしもべとその従者たちと一緒に送り出した」

うばの名前はデボラ。→35:8 そのほかに侍女たちもいた。→61

[60]「彼らはリベカを祝福して言った。『われらの妹よ。あなたは幾千万にも増えるように。あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように』」

このような祝福のことばをかけるのは花嫁を送り出す時の習慣であったのかもしれない。この祝福の歌はまさにリベカが加わろうとしている家系において成就することになる。

[61-62]「リベカとその侍女たちは立ち上がり、ラクダに乗って、その人の後について行った。こうして、しもべはリベカを連れ帰った。一方イサクは、ベエル・ラハイ・ロイ地方から帰って来ていた。彼はネゲブの地に住んでいたのがあった」

「ベエル・ラハイ・ロイ地方」死海の南西約40kmのベエル・シェバの近くにあった「ネゲブの地」死海の南西に広がる地域。

[63]「イサクは夕暮れ近く、野に散歩に出かけた。彼が目を上げてみると、ちょうど、らくだが近づいてきた」

イサクが野に散歩に出かけたのは黙想のためであったと思われる。ちょうどその時、彼が目を上げて見るとらくだに乗った人々の一隊が近づいて来た。これは牧歌的な情景である。

[64-65]「リベカも目を上げ、イサクを見ると、らくだから降り、しもべに尋ねた。『野を歩いて私たちを迎えにくる、あの方はどなたですか。』しもべは答えた。『あの方が私の主人です。』そこで、リベカはベールを手にとって、身をおおった」

しもべが花嫁を連れて帰るのを心待ちにしていたイサクは、ラクダに乗った一行が近づいて来るのを見て、それと気づいたのであろう。リベカもそのイサクの姿に、あるいはと気づき、確認のためにらくだを降りて、しもべに尋ねたと考えられる。「ベールを取って、身をおおった」ベールは婚約と結婚のしるし。結婚までは未来の夫の前で顔をおおっていた。

[66-67]「しもべは、自分がしてきたことを残らずイサクに話した。イサクは、その母サラの天幕にリベカを連れて行き、リベカを迎えて妻とし、彼女を愛した。イサクは、母の亡き後、慰めを得た」

ここには書かれていないが、時を定めて、アブラハムは息子イサクとリベカのために盛大な結婚式を挙げたと考えられる。「イサクは…彼女を愛した」神が選び与えてくださった妻はイサクにとって最高の女性であり、心から愛したのである。母サラを失って寂しさから抜け切れなかったイサクは大きな慰めを得たのである。→伝道者3:11a

このようにして、神のアブラハムへの祝福の約束はイサクへと受け継がれ、それはやがて来られる救い主イエス・キリストへと続いていくのである。

このイサクの結婚の記事を通して、私たちは主なる神が確かに約束を守られるお方であり、祈りを聞かれるお方であり、祝福を与えようと待っておられるお方であることを知るのである。

→ヘブル11:1、Iヨハネ5:14~15、詩篇37:5、138:8、イザヤ30:18